

令和3年度 第2回学校運営協議会(全日制部会)報告

【発送日時】 令和3年12月15日(水) 14:30～16:00

【出席者】

＜学校運営協議会委員＞ (敬称略)

川村 幸治(学校法人大阪国際学園 副学園長)、田井 秀夫(寝屋川市教育委員会 教育監) 林 浩子(寝屋川市立第一中学校 校長)、北村 譲(北水会会長)、毎野 寿美子(本校 SCSV)

＜寝屋川高校＞

田尻 由美子(校長)、住友 敏弘(事務部長)、山中 一郎(教頭)、達 大輔(首席) 白井 大輔(首席)、田頭 修(指導教諭)、中河 徳治(進路部)、中東 大輝(教務部) 原田 優(記録)

【資料】

- (1) 令和3年度 第2回学校運営協議会(全日制部会) レジюме
- (2) 令和3年度学校経営計画(各分掌・委員会における具体的な取組み)の進捗状況
ならびに 学力向上目標達成シート 各学年のまとめ
- (3) スタディサプリ導入について
- (4) 授業力向上のために取り組み
 - ①11/11 研究授業実施要項
 - ②各教科の目標
 - ③授業観察シート
 - ④令和3年度 新入生に対する研究授業およびその研究協議の総括
- (5) 観点別評価に関する取り組み

【次第】

1. 会長挨拶
2. 校長挨拶
3. 確認 「教員の授業とその他の教育活動に関する意見書」について ― なし
4. 授業見学
 - 1-4 化学
 - 1-5 英語表現
 - 2-9 保健

5. 資料説明

- (1) 進路部 — 進路中間報告、スタディサブリ
- (2) 研究授業
- (3) 観点別評価

6. 協議

◇スタディサブリ導入について

(これまでに導入している委員から活用についてコメントがあった)

- ・1人で自主的に取り組めない生徒へのアプローチを工夫する必要がある。
- ・教員で利活用の差が出るので、定期的に研修を実施して教員のサポートをする必要がある。

○研究授業

- ・資料から先生型のコミュニケーションのあり方が進歩しているように見受けられる。
- ・委員より観点別評価との関連について質問があり、担当からは観点別評価との関係では意図的に仕向けたわけではないが、部分的にそうだったとの回答。
- ・先生は一国一城の主になるからなかなか改善点を言いにくい、そういうことを言い合える雰囲気が大事で、一国一城の主である人の考えをどう変えていくかが課題である。
- ・カリキュラムマネジメント、教科の壁
単元を学んだ最後に生徒がアウトプットするようなものを廊下に貼ることで、他の教科でやっていることをお互いに知れた。教員の教科の垣根を超えた会話が生まれた。
1年生の廊下に3年生のノートを貼ることで良い効果が生まれた。教員間でも「この授業はどうやったの？」等という会話が生まれた。
- ・小中学校で対話的な授業を受けてきた子たちなのでやらせてみると意外と積極的にできるのではないか、寝屋川高校が大阪の改革の先陣を切ってほしい。
- ・先生が変わるのは難しいかもしれないが、逆にチャンスである。
- ・先生の授業が主役、スタディサブリの授業に負けない授業をしなければいけない。
- ・寝屋川高校のスタンダード、軸がきっちりしていれば生徒は安心するのではないか。

○観点別評価

- ・寝屋川高校として観点別評価の柱ができたときに研究授業は良い効果を発揮すると思われる。
- ・中学校での観点別評価の導入当時、先生方は悩んでいた。また、主体的対話的で深い学びにどうつなげるのか苦心していた。高校ではまだ教員が一方的に話す授業が多いのではないか。中学校では基本的なことを教えないとできないと悩みながらやっている。

○進路について

- ・進路の中間報告に関して、公募推薦での合格人数が増えていることで最後まで粘り抜く指導とのつながりを問う質問。
- ・一般選抜（特に後期まで）にチャレンジするように生徒の背中を押してやってほしい。

○その他

- ・将来どうなりたいのか、どう学ぶのか、選択肢を増やすために勉強しているのだということを生徒にわからせないといけない。
- ・やればやるほど壁にぶつかる、それをどう乗り越えていくか。